

ラルな語と語の結びつきはなかなかわかりにくいので、コロケーション辞典は大いに役に立つ。一度コロケーション辞典を手にとって使い始めると、その使い勝手のよさがよくわかり、英語を書くときにはコロケーション辞典が手放せなくなるであろう。今までコロケーション辞典を使ったことがない学生諸君はぜひ一度使っていただき、その便利さを肌で感じてもらうと同時に、英和活用大辞典の創始者・勝俣氏が前書きに書いていたように、時にはコロケーション辞典を「読み」、英語の奥深さ・面白さを堪能していただきたい。

補遺. 日本語のコロケーション辞典について

英語のコロケーションは、特にコーパスが言語研究に多く用いられるようになってからは盛んに研究され、辞典も多数発行されているが、日本語のコロケーションの辞典については、まだあまり発行されていない(ただし「表現辞典」「日本語使い方辞典」のようなものもコロケーションの辞典であると考え、それなりにあるが)。詳しくは日本語を研究している先生方に聞いていただきたいが、私が知っている日本語のコロケーション辞典としては次のものがある。

- ・金田一秀穂 (2006) 『知っておきたい日本語コロケーション辞典』学研
- ・姫野昌子 (2004) 『研究社 日本語表現活用辞典』研究社
- ・小内 一 (1997) 『究極版 逆引き頭引き日本語辞典 名詞と動詞で引く17万文例』講談社(講談社+ 文庫)【絶版】

金田一 (2006) は名詞を見出し語として動詞との結びつきを記しており、姫野 (2004) は動詞と形容動詞類を見出し語として挙げている。小内氏の文庫本はまだ日本語のコロケーション研究が盛んになされていないときに発行されたもので、なかなか面白い。言語学者ではない、校正を仕事とする小内氏が独自に集めた連語情報を載せたもので、その意味では「勝俣の活用」を思い起こさせる。その後、姫野 (2004) のようなより優れたコロケーション辞典が出たというものの、小内 (1997) の本が絶版になったのが残念である。

D.H.ロレンスの動物の描写 について (その4)

経営学部

山田 晶子

ロレンスは、*Birds, Beasts and Flowers* (1923) という詩集で、多くの動物を詠っている。ここで取り上げられている動物は数多であり、コウモリや魚や蚊から、亀や蛇等の爬虫類までが詠われている。中でも有名な詩として‘Snake’「蛇」がある。今回はロレンスの文学において重要な象徴性を持つ蛇について書こうと思う。

蛇と言えば、聖書の創世記におけるアダムとイブを誘惑した蛇が世界的によく知られていると言えよう。エデンの園と言えば蛇の存在が欠かせない。エデンの園は楽園なのに、蛇という恐ろしい存在が潜んでいる。永遠の楽園は存在しないのである。神との闘いに敗れた悪魔サタンは地獄に落とされ、神への復讐の機会を虎視眈々と狙っていたが、遂に神の大事な大事な創造物であるアダムとイブを誘惑して墮落させるという報復手段を思いついた。そしてアダムとイブは、蛇に化身したサタンの姦計にかかり、神の命令に背いて知恵の木の実であるリンゴを食し、エデンの園を追われたのである。以上のことを鑑みれば、蛇はキリスト教者にとっては悪の存在であり、世界中にキリスト教の思想は広まっているので、蛇は「悪」の存在として受け取られていると思われる。また、蛇は形姿の似ていることから竜と関連しているので、竜もキリスト教圏内では悪として考えられるようである。絵画においても竜を退治する聖ミカエルの主題はたびたび表われている。

しかし、一方では蛇や竜が「善」なる存在として考えられることも多い。ロレンスの作品に描かれた蛇や竜は、この「善」としての意味を持っている点で、彼の思想の独創性を表わすものとして

考えられるのである。キリスト教において蛇が悪であるのにそれを善として描くことになれば、書き手はキリスト教に批判的な立場にいることは明白である。ロレンスの有名な詩「蛇」は、キリスト教の価値観の逆転を述べているものであり、彼の思想の独創性が表われている作品として有名なのである。

詩「蛇」において、語り手「僕」は、イタリアの暑い夏の日に水飲み場で蛇に出会う。蛇を見た「僕」は怖くなって棒を投げつけてしまうのであるが、投げつけるに至るまでの心境を詳細に分析し、反省をしている。なぜ自分は蛇を怖がらなければならなかったのか、本当は蛇に話しかけたかったのに、蛇に対する愛着さえ覚えていたのに、と自分の行為を後悔する。怖がったのは今まで受けてきた教育のせいであり、教育というものの偏狭さを批判している（「(棒を投げつけたことは)なんと小心な、なんと下品で卑しい行為であったのか！/僕は自分を軽蔑し、のろわれた教育の声を軽蔑した」）。この後で「僕」は、穴の中へ逃げてしまった蛇にもう一度会いたいと思う。蛇は追われた王のように思われるのであったが、このとき「追放された王」という言葉は神との戦いに負けて地獄へ落とされた悪魔サタンを思い起こさせるのである。

また、第9作目の長編小説『羽鱗の蛇』(The Plumed Serpent 1926)においては、大蛇そのものが小説の題名として用いられている。この小説は、ロレンスがメキシコに滞在していたときに知った古代アステカ文明の神ケツァルコアトルについての神話を題材として小説を書いたものである。「羽鱗の」という形容詞が用いられていることから分かるように、この大蛇は羽毛が付いた蛇なのである。つまり「鳥」の性質を備えた蛇なのである。蛇と言えば大地の上を這い、地中に潜ると考えられているが、アステカ人たちは、蛇が空を飛ぶと考えたのであった。ゆえに男女という二元を基に様々な範疇の二元の均衡を唱えるロレンスは、ケツァルコアトルの信仰を唱えるインディアンの男性2人を主人公にして、精神性を唱える一道のキリスト教に反するものとして、精神性(天)と肉体性(大地)の二道を目指すケツァルコアトルを描いているのである。これが『羽鱗の蛇』とい

う題名の意味である。ロレンスにとっては「肉体」というものが抑圧されていたヴィクトリア朝の思想とキリスト教の横暴に対して、「肉体」を奪回することが非常に重要なことであった。しかし現代において「肉体」が重視されているかと言えば、ロレンスの思想とはまた大きく異なった方向に向かっていえる。肉体と精神の二元の関わり方は人間にとって永遠の課題であろう。

アメリカセミナー紹介 サウスイースト ミズーリ州立大学

法学部
北尾 泰幸

1. はじめに

愛知大学は国際交流センターが中心となり、夏休みにアメリカ・イギリス・ドイツ・中国に、春休みにフランス・中国・韓国・イギリス・オーストラリア(ただし2009年度はイギリス・オーストラリアの代わりにカナダ)に、約4週間語学研修を行う「海外短期語学セミナー」を実施している。セミナー参加者で、研修先で所定の単位を修めた者は、帰国後教授会の審議を経て、共通教育科目「海外セミナー」の単位(2単位)を得ることができる。私は国際交流センター委員として、今まで2008年度夏期の「アメリカセミナー」(研修先:サウスイーストミズーリ州立大学)、および2009年度春期の「カナダセミナー」(研修先:クイーンズ大学)の学生の引率を行った。2009年度夏期はインフルエンザの流行により海外短期語学セミナーが全て中止になったが、今年度は予定人数が集まれば、例年どおりセミナーが開かれる。そこで、今回は私の引率体験を踏まえたアメリカセミナーの紹介を行いたいと思う。